

第五節 山 論

1 「駿河との国境論争訴状」 元禄十四年（一七〇一）

〔解説〕 富士山麓、西側八カ村の成沢村・長浜村・木立村・

船津村・浅川村・大石村・勝山村・大嵐村は、元禄十四年（一

七〇一）四月、駿河国富士郡杉浦兵九郎知行所の上井出村名主

次兵衛・同国守屋助次郎知行所の根原村名主利兵衛を相手どり

甲・駿国境の境界線について訴訟を起こした。両者の訴答は大

きくくい違いをみせたが、翌十五年十二月、訴訟方の言い分が

ほぼ認められ裁許解決された。本訴状は写であるが、河口湖町

船津の中村和行家に所蔵されている。

乍恐以書付御訴訟申上候事 (写)

秋元但馬守知行所

甲斐国都留郡

成沢村

訴訟人 伝 兵 衛

長浜村

三右衛門

木立村

弥五兵衛

舟津村

清 兵 衛

浅川村

市 兵 衛

大石村

三 郎 兵 衛

大嵐村

太 郎 左 衛 門

勝山村

武 兵 衛

国境出入

杉浦兵九郎様御知行所

相手 駿州国上井出村

名主

次 兵 衛

守屋助次郎様御代官所

同国同郡根原村

名主

利兵衛

通御座候、御うたせ被遊被下候ハ、彼逢坂樋成国境相知可申候事

一 甲斐国都留郡成沢村、駿河国富士郡上井出村与之境者、古々片婦た山之峯通々往還道江移、夫々往還逢坂与申処境ニ而、則境之印檢・婦なの木御座候、夫々丸山南之角長山、無間ヶ谷三満たを見通兩國立合、生木ニ伐判仕置、其内江者他領之者一円入不申候、郡内領山本八ヶ村之者共斗入込、先規々小屋四拾三軒掛置、先年々江戸芝三町目紀伊国屋小左衛門与申山師請負仕候而、毎年拙者共地頭但馬守江運上金出、代々掛置候小屋ニ而、只今に至袖取仕、板材木駿州富士郡山出仕候、則上井出村名主次兵衛、北山村忠左衛門、右之材木宿仕候而、駄賃錢受取付送申候事紛無御座候、委細右山師小左衛門存罷在候事

一 右之所丸山ヲ始郡内領前々御巢鷹山ニ而御座候故、先年御公儀様江差上、御鷹方様々御証文教通所持仕罷在候事

一 御公儀様ニ先年々御座候御国絵図ニ茂甲州駿州境が上井出村迄三里六丁と御書付御座候由及承申候、今以其

一 先年根原村之者共、右之境逢坂丸山跡越、剩境之印檢を伐候間、袖道具此方々押江置取候処、上井出村名主齋藤五兵衛、中出村市兵衛与申兩人ヲ以、様々詫言仕候故、自今以後、弥伐判が内江參間敷旨手形為仕、道具者遣申候、右之手形わ今拙者共所持仕候事

一 四拾四年以前、根原村之者共御用木伐候節、郡内領江盜入候故、伐候槻拾七本押置候得者、根原村之者共、江戸江罷越

御公儀様江訴候得共、御取上無御座、其節之御代官一色内藏助様、井出藤右衛門様、富士郡大宮ニ而、双方御詮義被成候処、郡内領之山江盜入候ニ相究候得共、大火事以後伐木^{材カ}払底、其上御用木之事故、右御兩人様が右之盜木拾七本御費被成度由被仰候

御公儀様ヲ重、拾六本は差上、忝本者重而証拠のため御断申上、留置申候、只今ニ至其所ニ差置申候、右之通境樋ニ相極々証拠数多御座候所ニ、此度御絵図之義ニ付而、上井出村・根原村之者共申候者、式拾八年以

前、上井出村・根原村ヲ始、三拾（本番付）ヶ村与諍論之節差出候富士郡北山村之内、志奈ミツ、井出九郎左衛門所持仕候元龜三年三月、山県三郎兵衛殿証文ニ、東者湯沢、西者天神嶽与御座候而、其証文之通御裁許相濟申候、片婦た山之後ニ天神嶽御座候与、右御裁許絵図之面書付有之候間、天神嶽国境之由申候、此義大キ成偽ニ御座候、北山村（小カ）ヲ東者湯沢ニ当申候、西者駿州佐折村江当り可申候、佐折村与甲州佐野辺ニ古（小カ）ヲ天神嶽与申山可有御座候、片婦た山者北山村（小カ）ヲ北ニ当可申候、片婦た山（小カ）ヲ式拾丁余此方ニ少キ天神之社御座候、其所ヲ天神尾与申候、是者格別方角違ニ御座候、其上先年御裁許書ニ茂のり候程之境御座候ハ、其節（小カ）ノ境ニ相立べき之由可申候所ニ、何方（小カ）ヲ茂何之沙汰茂無御座候、夫（小カ）ヲ拾年過亥年、富士郡之百姓、御代官如何申候哉、井出次左衛門様、前嶋佐次右衛門様、御手代衆三人、富士郡之百姓拾三人被召連、郡内領谷村江御越、但馬守役人共御出合、栖村与諍論相濟候御裏書・御墨引有之絵図御持参ニ而、御見せ被成候、其節拙者共御

手代衆并右之百姓共江申候者、片婦た山之後ニ天神嶽御座候与書付相見江申候得共、片婦た山之後者郡内領ニ而、天神嶽与申山曾而無御座候、其上右申上候通、往還逢坂無間ヶ谷（小カ）ヲ此方丸山ヲ始郡内領之御巢鷹ニ而、先年御巢鷹差上、御証文數通被下置候由申上、御証文之写御手代衆江懸御目ニ候得者、証拠（小カ）ニ有之、尤之由御申候故、弥先規之通互ニ境相守可申旨御手代衆江但馬守役人共御挨拶申候、百姓共茂免角之義不申、其通ニ而罷帰申候、然処此度境ヲ越郡内領境可申掠工ミに、先年御裁許絵図之面、片婦た山後ニ天神嶽御座候与偽書付置候与奉存候事
右之通証拠數多御座候而、昔（小カ）ヲ違論無之境を此度偽被申懸迷惑ニ奉存候、上井出村之者共被召出、前、之通両国之境相究り候様ニ被為仰付被下候ハ、難有可奉存候 委細之義者、口上ニ而可申上候 以上

元禄十四年

巳四月日

御奉行所様

（河口湖町船津・中村和行家藏）

2 「甲・駿国境論争裁許状裏書」 元禄十五年(一七〇二)

〔解説〕 前掲訴状による甲駿国境論争の裁許状で、甲斐国側(鳴沢村ほか七カ村)が全面勝訴となった内容が記録されている。本書の表は彩色された絵図で、両国々境は図面上に墨引きがされ、この訴訟を裁決した役人の黒印が押されている。この裁許状と同じものが相手側の富士宮市役所にも保管され、その写が勝山村などの関係町村に所蔵されている。

甲州都留郡成沢・大嵐・勝山・木立・舟津・浅川・大石・長浜以上八ヶ村与、駿州富士郡上井出、根原村国境論之事、八ヶ村百姓訴趣、八代郡本栖村境より、片蓋山峰下り逢坂迄道筋界之丸山之麓より長山江相統、無間谷三俣江見通、同国本栖・成沢村之者立会、生木ニ致切判境相守、郡内領八ヶ村より小屋四拾三軒掛置、且又山師板材木等富士郡上井出村、北山村之者江数年付送候、又上井出村江従甲州境行程三里六町有之旨、正保年中御国絵図ニ書記し由申伝候、郡内領丸山者御巢鷹山ニ而、御鷹差上候節請取之証文数通有之旨成沢村之者申之、上井出村、根原村之者申国境之儀、式拾九年以前八代郡本栖

村、富士郡三拾壹ヶ村諍論之節、御裁許有之被下置候絵図を以証拠ニ申立今般及異論候、其外元龜三年従信玄被出候証文ニ東者湯沢、西者天神嶽有之、自其富士山頂上薬師嶽迄見通三拾壹ヶ村入会之由答之、右論所為檢使佐橋左源太・宝七郎左衛門被差遣、遂檢分処、甲州百姓申通片蓋山峯より往還道江移り、長山尾崎迄、境印切判大木数多有之、甲州百姓申所相違無之、自其長山之尾崎より上り峰限、無限谷三俣江見通相当り、特ニ山小屋数拾軒慥有之、材木付送候儀上井出村・北山村兩名主、組頭并山師無相違由申之、次從八代郡境、上井出村迄之路程、正保年中之大絵図令点檢処、三里六間(マ)有之、其上前之異論古証文ニ方角偽之段、今般檢分之上令露頭候、然者八代郡分先裁許ニ駿州江紛入候与相見候段、郡内領申巢鷹山之儀、上井出村、根原村百姓申候山之名雖令相違、巢鷹請取之証文逐吟味候ニ、成沢駿州境丸山与記之、従信玄巢鷹守被下置証文ニ而、国境之証拠不相見、剩於湯沢、両国百姓立会方角改之処、富士絶頂北方ニ相当り、自是西方天神嶽無之、北方有之弓射塚天神嶽之由申立、右証文与方角致相違候、却而、從湯沢西方ニ当り天子嶽

大絵図ニ茂載之候、甲州百姓者、天神嶽与雖称来方角相違無之、駿州百姓誤候旨証文差出之候、然上者、旁以甲州百姓為理運、仍本栖・駿州境共改之、為後証絵図之面引墨筋各加印判国境相定、双方江下置之条、永守此旨、不可違犯者也

元禄十五年壬午十二月四日

中半右衛門

- 戸備前
- 久因幡
- 荻近江
- 丹遠江
- 保越前
- 松伊豆
- 本弾正
- 阿飛騨
- 永伊賀
- 丹後
- 但馬
- 佐渡
- 相模

豊 後

(鳴沢村役場現蔵)

3 [甲駿国境論誓詞御案文覚] 元禄十五年(一七〇二)

[解説] 甲駿国境論争の裁許に先だち、幕府は甲駿両者を論

所(境界論争の場所)に立ち合わせた。また、絵師も双方から出し裁許絵図を描かせ公平を図った。そのため、双方の立会者、絵師に誓詞御案文を書かせ提出させた。この史料によると幕府の御案文を写し、御本書を返したとあるので、御案文はあらかじめ幕府が作り関係者に誓詞させたものと思われる。上井出・根原両村の関係者が甲州方八カ村の代表者成沢村の伝兵衛にあってた「覚」であり、双方が誓詞を交換し合ったものと思われる。

覚

一論所江双方立合誓詞御案文 彦通
 一双方絵師之誓詞御案文 彦通

ノ式通

右従 御公儀様御案文双方江被仰付、持参被成ニ付、

拜見則写シ仕、御本書者返シ申候、為後日如此ニ御座候、以上

元禄十四年巳五月十三日

駿州富士郡上井出村

名主 次 兵 衛 ④

組頭 源 左 衛 門 ④

同 甚 五 兵 衛 ④

同 与 三 兵 衛 ④

同 九 郎 右 衛 門 ④

同 伝 左 衛 門 ④

同国同郡根原村

名主 利 兵 衛 ④

組頭 市 郎 兵 衛 ④

同 孫 右 衛 門 ④

三 拾 耆 ヶ 村 ④

甲州都留郡成沢村

伝兵衛殿

(鳴沢村役場蔵)

4 「富士山内出入一件済口証文」 宝曆五年(一七五五)

〔解説〕 訴訟内容は明確でないが、訴訟が内済(示談)となつたことを代官所へ、惣百姓全員が署名連印して差し出した

もので、今後、富士山内の出入りについで願ひ事は、村役人・惣百姓が相談の上取り決めようというものである。

差上申済口証文之事

一去冬六郎右衛門御訴訟申上候ニ付、名主・組頭・与惣兵衛御召被遊御吟味之上五人組切にと、尙通つゝ入置候出金証文不残相返シ申候并六郎右衛門組合ニ而甚五兵衛方江入置候証文相返シ、其上村役人谷村遣共与惣兵衛方ニ而差出、其外諸書物連判書等茂相返シ、双方村内ニ而手打相済申候、村中が申談シ候儀在、其外諸書物証文当時無之候間、如何致候哉、と与惣兵衛方申候得バ、諸証文通り在覚無之、尙通之証文ハ我等茂不覚ニ有之左候得バ、不埒之由申之候故、若御奉行所様江差上置候哉、夫共村内彼是申候ニ付谷村御役所様迄御窺ニ熊出候得バ、宿善右衛門其外六郎左衛門・六郎兵衛罷登リ双方江異見仕、内済之趣乍恐左ニ申上候

一村中ノ山内証文有之候哉、否与惣兵衛方江申掛、与惣

兵衛義在考通之証文ハ、御奉行所様へ差上候哉、惣代

之者不分明ニ候得バ、与惣兵衛方ニ而江戸表江罷下リ

御窺茂可仕哉と申候而谷村迄罷下リ候儀ハ心得違イニ

御座候

一富士山内出入之儀ニ付、何連之願ニ而茂村役人惣百姓

相談之上了簡次第ニ仕筈、若又御奉行所様ノ先達而之

印形通りにと御召被為遊候ハ、無遅滞可罷出候、然

上ハ与惣兵衛儀、村内相談之儀何ニ而も、此上村相談

之通堅ク致返具候事

右之通双方得心之上内済仕候ハ、重而相互ニ申分シ無御

座、此上決而申問敷候、然上ハ此儀ニ付聊御役所様江茂決

而申上問敷候、為後日内済得心書一札連印ヲ以差上候、

以上

宝曆五年亥二月

山本平八郎様

御役所

村方惣百姓

八郎左衛門印

庄兵衛印

安兵衛印

乍兵衛印

戸右衛門印

重兵衛印

平助印

平右衛門印

久衛門印

三郎衛門印

宇衛門印

武衛門印

助三郎印

五郎衛門印

安左衛門印

四郎兵衛印

孫兵衛印

甚太郎印

庄左衛門印

(以下署名連印略)

(鳴沢村役場蔵)

5 [富士北麓東、西組境界出入裁許御請証文]

宝曆五年(一七五五)

[解説]

大嵐・勝山・木立・舟津・浅川の五ヵ村(成沢を舍

む西組)は成沢村と新屋村外十ヶ村(東組)を相手どり、入会山

の境界とその權益をめくり訴訟を起こした。新屋・松山・上吉

田を除く東組は、富士北面には東・西組の入会の境界はないと

成沢村

願人 与惣兵衛印

小左衛門印

八郎右衛門印

主張、成沢村は定式運上納入、六カ所の御巢鷹山管理をたてに、そこでの山稼ぎは不当であることを主張した。裁判の結果、東西組境界線の再確認と、御巢鷹山六カ所（鳴沢村）の各十町四方と、成沢村年貢納入地での山稼は禁止することを命じた。この文書はその裁定をうけた村々の御請証文である。

〔宝暦五年 富士内山 出入書上証文写 亥四月十九日〕

甲州都留郡大嵐・勝山・木立・舟津・浅川・五ヶ村訴上候者、富士山麓之儀、西者駿州国境、東者小御嶽山頂上夫々猿山之峯中央江見通し、劔御巢鷹山東之端ヲ限り、西組、東組山境にて、右五ヶ村并大石・長浜・成沢八ヶ村入会、山稼致来り候処、成沢村之者共、六尺以上之材木ハ山稼不為致旨、且御巢鷹山者丸山沓ヶ所之所六ヶ所之由申之、其上駿州往還道下者成沢村内山之由ヲ申、山稼相障候旨申之上候

一同国同郡成沢村答上候者、成沢村者定式御運上相納山稼いたし、訴訟方々者御運上不納候故、私用之木品之外山稼者不為致、駿州往還道下ハ切替畑有之御年貢相納、成沢村内山にて入会ニ者無之、御巢鷹山者字丸山

・三敷山・大寿み山・劔山・木物焼山・こびそ立山六ヶ所が御巢鷹納来り、東組山境ハ小御嶽山頂上より猿山峯之西江見通し劔御巢鷹山ヲ限り山稼之由申上候

一東組十沓ヶ村之内、一同国同郡新屋・松山・上吉田三ヶ村者、劔丸尾下者地藏丸尾中央東組・西組山境之由申之上・下吉田・新倉・大明見・小明見・忍草・山中・平野・長池八ヶ村者、富士北面山境ハ無之一同入会候旨申之上候

右出入被為遂御吟味候処、御決難被遊ニ付、御代官藤沼源左衛門様、藤本甚助様両御手代被差遣、御吟味之上、猶又被為遂御糺明候所、訴訟方申上候駿州往還道下成沢村内山ニ者無之入会之由申上候得共証拠無御座、右場所ニ者成沢村が御年貢納候切替畑茂有之、同村内ニ無紛、御巢鷹山者丸山沓ヶ所之由申之上候得共、丸山、三敷山、大すみ山、劔山、木物焼山、こびそ立山六ヶ所共御巢鷹之古巢、其外証拠書物数多有之、御巢鷹山ニ無相違、訴訟方申上候趣難相立、相手方申上候成沢村者、定式御運上永六貫弍百五拾文、保太木役永五百文致定納。訴訟方ハ御運上不納候故、山稼者不

為致由申上候得共、山中口江斗板材木付出し、木敷御改
 ヲ請御連上相納、相手方ハ山中口江も同様ニ付出し、
 定式御連上納候儀ハ、板材木極印ヲ打、駿州富士郡上
 井出村、根原村両国境論之節、御裁許絵図御裏書ニ、
 郡内領八ヶ村ノ、小屋四拾三軒掛ケ置旨有之候上ハ、
 八ヶ村一同入会山稼致来候義無紛、成沢村申上候趣難
 相立、且下吉田外七ヶ村之者共儀、富士山北面山境ハ
 無之旨申上候得共、元文元辰年、東組十屯ヶ村ニて入会
 山論之節、東組ハ駿州須走国境ノ西者隣郷成沢村組合
 八ヶ村入会場之外ヲ拾屯ヶ村可入合旨御裁許有之、入
 会場之外迄者、上組入会場ヲ除キ候義ニて、其砌西組ハ
 ケ村ハ出入不加、前書之ことく、元禄年中西組八ヶ村
 与駿州上井出、根原両村国境論之節も、東組拾屯ヶ村
 者不抱上者、東組、西組山境有之儀曆然ニて、下吉田
 外七ヶ村無境与申儀、是又難相立、双方申上候境筋も
 区々ニて御取用難相成、新屋村外二ヶ村申立候上者、
 劔丸尾下者地藏九尾与唱江、往古ノ之儀ニて馬之通ハ
 難相成思召候、依之被仰渡候者、大嵐・勝山・木立・
 舟津・浅川五ヶ村共ニ前々之ことく成沢村同様入会山

稼致、大石・長浜両村者山稼望無之、今般出入相洩候
 ニ付不及御沙汰ニ候、且御巢鷹場丸山、三敷山・大す
 み山・劔山・木物焼山・こびそ立木山六ヶ所共拾町四
 方者双方共山稼者勿論、枝葉、下草共御停止之御巢鷹
 者、是迄之通り成沢村進退致、右之内劔丸尾中央ヲ限
 リ御巢鷹山之境相心得、駿州往還道下ハ成沢村内山ニ
 極リ、訴訟方入会御差留被遊候、且又東、西組山境
 者、上者劔丸尾ノ地藏堂与、丸尾之中央東西組山境与
 相守、違乱仕間敷旨被仰渡、遂承知奉畏候、若相背候
 ハ、御科可被仰付候、仍為御証連判一札差上申処如
 件

山本平八郎御代官所
 甲州都留郡大嵐村
 宝曆五亥年

四月十九日

名主
 市右衛門
 勝山村

名主
 七郎右衛門

訴訟方

木立村

組頭
庄左衛門

百姓代
仲代
兵衛

舟津村

名主
源兵衛

組頭
文左衛門

浅川村

名主
市太夫

同国同郡成沢村

名主
源兵衛

相手方

組頭
半蔵

百姓代
伝五右衛門

新屋村

組頭
源兵衛

百姓代
与一右衛門

上吉田村

名主
左内

百姓代
文左衛門

松山村

名主
角左衛門

組頭
久左衛門

忍草村

名主
庄左衛門

下吉田村

名主
文左衛門

組頭
治左衛門

百姓代
半左衛門

新倉村

名主
藤右衛門

御奉行所

同
丈左衛門

大明見村

名主
定右衛門

百姓代
源次右衛門

小明見村

名主
太良左衛門

百姓代
孫次右衛門

山中村

名主
所左衛門

平野村

名主
七左衛門

長池村

名主
滝右衛門

(鳴沢村役場所蔵)

6 〔成沢村・精進村境界論争裁許状〕

天明三年(一七八三)

〔解説〕 安永九年(一七八〇)四月、野頭山で山稼ぎしていた精進村の者が、成沢村の者に斧三挺を奪われ、谷間に掛け置いていた橋を壊されるという事件が起き両者の間に訴訟が起きた。成沢村の言い分は、精進村側の言う野頭山は、成沢村字木物焼山で御巢鷹山でもあり、不当な入山であると主張。事件は郡境でもあるため、谷村代官直々の検分となり、両者の言い分は根拠のないものと、新たに西湖村山之神より南鹿之頭へ見通した南北の線を村境(郡境)と裁断、絵図へ墨引きし両者が互いにこれを守るよう裁許した。本書写は渡辺泰一家に所蔵されている。

事 甲斐国八代郡精進村与同国都留郡成沢村地所論裁許之

精進村訴趣、同村持山内にて山稼いたし居処、成沢村之もの共罷越理不尽ニ斧奪取旨申之、成沢村答趣同村持巢鷹山ハ、山稼停止之場所之処、精進村持山之由にて入込致山稼候間差留斧三挺押置旨申之、右論所郡境に拘故、

御代官中井清大夫被差遣遂亂明所、元禄十五年甲斐・駿河国境出入裁許絵図面之内、八代郡西湖村枝郷根場の東より片蓋山へ見通し八代郡留兩郡境相分有之、右見通より東ハ都留郡成沢村、西ハ八代郡精進村持山にて右之内字野頭山ハ同村巢鷹山にて境を限山稼仕来ニ付、去ル子四月野頭山にて致山稼処、成沢村之もの共罷越理不尽に斧三挺奪取谷間に懸置橋取払通路差留由訴訟方申之、相手成沢村にてハ精進村山境ハ、北ハ往來道字丸太より南へ逢坂切判丸尾穴大こつは、此所成沢・精進・本栖三ヶ村山境にて、夫より字鹿之頭丸尾通片蓋山迄へ見通し、西ハ八代郡精進村・本栖村、東ハ都留郡成沢村持山にて、訴訟方より野頭山と申立場所ハ、字木物焼山と唱右山并こひそ立山式ヶ所ハ巢鷹山にて拾町四方つゝ山稼停止之旨、宝曆五年裁許有之、木物焼山にハ鷹之古巢も有之、其外切替畑并山手永相納場所も有之、元禄十五年国境出入裁許絵図面郡境之色分有之所、前々も境を越精進村より度々入込、其度々相詫問取置書付も有之処、山稼停止之場所へ入込間斧三挺押置、谷間に懸置橋取払旨雖申争、元禄十二年裁許書之内鹿之頭へハ精進村不入会旨

有之、持山内におゐてハ其節右鉢可申立様無之、同十五年甲斐・駿河国境出入裁許絵図面之内、西湖南縁通より南坤之方へ見通し、北西ハ八代郡、東南ハ都留郡之色分有之、西湖村申口も令符合、論所一円持山之由ハ訴訟方申分難取用、相手成沢村も山稼停止之旨、先裁許有之場所ハ今般之論外にて論所之内にハ致山稼諸、數ヶ所有之停止之場所にハ無之、鷹之古巢之由も不令治定、精進村より取置書付ハ論所へ致的当儀無之、切開畑も論所之内に不相見、山手永も論外、持山數多有之論所之内山手永之由ハ証拠無之、論所一円持山之由相手方申分も難取用、依之今般評議相定ハ、北ハ西湖村山之神より精進・成沢・本栖三ヶ村山境夫より南鹿頭へ見通し、西ハ八代郡、東ハ都留郡と心得互に境を越入込間鋪旨裁断畢、仍為後鑑絵図面引墨筋各加印判令裏書、双方へ下授間永不可違失者也

天明卯年五月二日

赤越前[㊦]

松伊豆[㊦]

山信濃[㊦]

7 〔入会山境界論争裁許御請書〕

文政十三年（一八三〇）

（絵図裏書・鳴沢村役場蔵）

〔解説〕 勝山村・大嵐村・船津村・上浅川村の四カ村は、文政十二年（一八二九）、成沢村・木立村ニカ村を相手に、入会山境界をめぐるって訴訟を起こした。この裁判は奉行曾我豊後守が担当し（勝山村史料）、裁定をくだしている。この史料にはその裁許内容が記録され、双方の村役人がこの裁定について異議は

桑 伊 予^印

曲 甲 斐^印

牧 大 隅^印

牧 豊 前^印

安 対 馬^印

井 河 内^印

阿 備 中^印

大 和

主 殿

周 防

申し立てないと、奉行所へ差し出した「御請証文」である。同内容の資料が勝山村小佐野友市家に所蔵されている。

差上申一札之事

私共出入御吟味之処、地所之儀難御決ニ付、御代官和田主馬様・大草太郎左衛門様両御手付御手代衆被差遣、再応被遂御糺候処、訴訟方之義、宝曆五亥年、今般之訴訟方勝山村外三ヶ村并相手木立村ニ成沢村江相掛及出入候節、御裁許有之候ハ、山稜之儀ニ而既其砌、富士山麓之儀西者駿州境ニ東ハ小御嶽頂上、夫ニ猿山之峯中央江見通、劔御巢鷹山東之端越限リ東西組山境之旨申立、御裁許文段ニ茂、大嵐・木立・船津・浅川五ヶ村与茂、如前々之成沢村同様入会山稜可致、并東・西組山境之儀茂、上者劔丸尾ニ地蔵丸尾迄、丸尾之中央境ニ可相守与有之、秣場入会之儀者御沙汰無之、同年十月中、成沢村枝郷大田和組之者共与勝山村及出入候節、字炭焼塚ニ西江見渡、駿州往還道上ヲ限リ秣肥草与茂入会ニ可致筈、内濟議定致、濟口証文御支配役所江一旦差出候与茂故障之儀有之、右出入御下ケ之儀相願、勝山村年寄弥兵衛外屯人立会之上御下ケ相成候旨認候書面江、其砌之扱人共奥印致、相手方

江渡置候上ハ、右申分難御取用論外、東組拾壹ヶ村之内
 忍草・山中両村出入御吟味之節、甲・駿往還上裾野与唱
 本途高内屋敷ヲ除山畑野畑之分ハ年々切替候故、跡地荒
 野者入会秣場ニ候間、組合村々申立候与茂、去戌年木立
 ・勝山両村出入節、勝山村ニ而字中砂与申立候場所ガ北
 手ニ六ヶ村入会场無之趣、書面差出候儀茂有之、旁不都
 合之申立ニ而、今般境引通論所一円双方六ヶ村入会来候
 秣場之由者難御取用相手方之儀茂、木立・成沢両村境者
 三ツ境塚ガ午之式分江見通与申伝候由茂今般見通不引
 合、右塚者勝山村地境江茂相懸り候由乍申立、同村江不懸
 懸合を、塚築立候上者、前々ガ有来候由之申分者、難被成
 御信用、論内作付地者、本畑ニ而切添地与申立候外者不
 残、寛文之度檢地請候地所之由茂孰茂多分之余歩有之、
 殊成沢村明細帳ニ、山畑野畑共切替場所与認メ有之、并宝
 曆年中、忍草・山中両村出入之節、裾野付村々新屋・上
 吉田・松山其外、成沢組合八ヶ村共不殘御札有之候処、
 甲・駿往還上裾野与唱本途高内屋敷ヲ除、山畑野畑之分
 者年々切替候故、跡地荒野者入会秣場ニ候旨、一同申立候
 趣茂有之候上者、更ニ入会秣場と無之由之申分茂難御取

用、其餘無証拠申争迄之儀者、双方共難御取用候、依之以
 来成沢村ニ而字釜之口与唱候場所、駿州往還端い之印七
 拾七番杭ガ相手方ニ而三ツ境与申立候、塚上ろ之印式拾
 壹番杭江見通、夫ガ分間四拾三番杭際之塚江引付、南之
 方者双方六ヶ村入会秣場与心得、切開者勿論木品立出等不
 致、右繩筋北手ニおめて村々地先限切替作致し、船津村
 境ニ有之候塚九ヶ所之内九ヶ所并三ツ境塚ガ南之方三ヶ所
 之塚者、双方立会之上可取弘旨被 仰渡候、

一、成沢村役人共義、論所之字大砂壹ヶ所与心得、其余之
 場所江小前之もの共手入致候ヲ篤と糺義茂不致、小立
 村役人共儀茂御支配御役所ガ論所御見分之砌不用之人
 足差出申間數旨被仰渡有之候処、人足之外見物ニ罷出
 候もの茂有之、過人数ニ相出、既惣右衛門召捕ニ相成
 候次第ニ至り候段、申付方不行届不埒ニ付、両村役人
 共一同急度御叱リ被置候、

右被 仰渡之趣一同承知奉畏候、若相背候ハ、御料
 可被 仰付候、仍御請証文差上申処如件

大貫次右衛門御代官所

甲州都留郡

文政十三寅年九月三日 訴訟人

勝山村

小前村役人惣代

組頭 勇右衛門[㊦]

御奉行所

与頭 半

七[㊦]

(鳴沢村役場蔵)

大嵐村

右同断

同 年寄 勝右衛門[㊦]

船津村

右同断

同 同 善左衛門[㊦]

上浅川村

右同断

同 名主 角左衛門[㊦]

小立村

右同断

相手方 年寄 源兵衛[㊦]

同 同 平五郎[㊦]

成沢村

右同断

同 同 八百蔵[㊦]

8 「入会山境界裁許の心得違ひにつき願書」

文政十三年(一八三〇)

〔解説〕 前掲史料の関連文書である。先に入会山境界について奉行所は、境界の目印である分間の塚十一カ所を取り扱うこと、六カ村の入会秣場、切替畑、切り開き箇所を裁決し事件は落着いたが、訴答村々は、その裁許状の文言を誤解し事件は再吟味となったが、村々は文言の意味を納得し、早急に塚十一カ所を取り扱うので、吟味を中断して欲しいと、願ひ出た願書である。

乍恐以書付奉願上候

甲州勝山村一件之者共、奉申上候、私共儀先達而被 仰渡候御裁許文鑑之内、心得方相違之儀有之、訴訟方^ノ願書を以申上候ニ付、相手御呼出之上、区々致居廉御亂御座候処、相手方ニ而者、御裁許御文鑑ニ以来、成沢村ニ而字釜之口唱候場所、駿州往還端い之印七拾七番杭^ノ、相手

方ニ而三ツ境塚与申立候塚之上ろ之印式拾壹番杭江見
 通、夫が分間四拾三番杭際之塚江引付、南之方ハ双方六
 ケ村入会秣場与心得、切開勿論木品立出等不致、右繩筋
 北手ニおゐて、村々地先限切替作致、船津村境九ヶ所之
 内、八ヶ所并三ツ境塚与り南之方三ヶ所之塚共、双方立会
 之上、可取弘旨被 仰渡有之候を、御裁許以前御分間御
 座候節之繩筋を、前文之右繩筋与相心得申立候処、右者
 い之印おろ之印江見通、猶分間四拾三番杭際之塚へ引付
 け候与申筋之旨被 仰聞、且又双方六ヶ村入会秣場与心
 得。切開致候儀与相心得候段申上候処、右ハ切開ハ勿論、
 木品立出等者不致与申儀者、両様共不相成義与申御文鑑
 之由厚御利害被 仰聞、全相手方之心得違ニ而、造^(造カ)承
 伏奉恐入候、然上者右之段双方相心得、一同立会可取弘
 拾壹ヶ所之塚者、訴答村役人共立会、早々取弘可申候、
 依之一同申分無御座、相手方相弁候ニ付、何卒以 御慈
 悲を御吟味是迄ニ而、御下被成下候様、一同連印を以奉
 願上候、以上

大貫次右衛門御代官所

甲州都留郡

大嵐村

船津村

上浅川村

右三ヶ村惣代兼

勝山村

与頭

訴訟人 勇右衛門

小立村

役人惣代

相手 年寄

平五郎

成沢村

同

与頭

同 半 七

御奉行所様

前書之通奉願上候所、願之通り御聞濟被 遊候段、仰

渡、一同承知奉畏候、依之奥印を以申上候、以上

文政十三寅年

十一月七日

右

勇右衛門

平五郎

半七

御奉行所

(勝山村・小佐野友市家蔵)

9 (足和田山論訴返・越訴控) 安政五年(一八五八)

〔解説〕 この史料は、富士吉田市渡辺茂家のもので、成沢・

大嵐両村の間に起きた「段の尾山」の境界線をめぐる争論で、

事件はもつれ谷村代官の裁定を不服とした成沢村民は「籠訴」

という強行手段に出たが、谷村代官所に差し戻された。本村所

蔵史料(別掲)では、事件の初見は文久三年(一八六三)である

が、この史料で事件の発端は五年前の安政五年(一八五八)で

ることが知れる。事件の結末は裁許状がないので不明である。

内容からして事件は終始成沢村が不利であったと思われる。

不法御吟味願

成沢村

組頭

甚左衛門

相手

百姓代

幸左衛門

右願人共奉申上候、当村之儀者、御高五拾六石八斗五升

余、当家数三拾五軒ならてハ無之、富士山裾野極辺鄙之

村方にて、境界之儀者、東者勝山村、北者長浜村、西者成

沢村境にて、相手村方地統ニ有之候得共、右境筋往古ハ堀

割有之、尤当村者農業之分余業無之、^(外カ)実ニ困窮村方ニ御座

候、然ル所、当村分内字段ノ尾山之義者、成沢村境筋ハ当

村内ニ孕リ居リ、往古ハ当村にて山役永御上納仕、秣其外

共取来、先年秋元但馬守様御領分之節者、青草拾壹駄者干

草にて正納仕候所、御領所ニ相成、格別之思召ヲ以、代永

上納被仰付来り、其段村差出明細帳江茂書載有之、年々

八月村役人ハ小前方江触渡シ、当村一同にて右段野尾山

道造致シ、後猶日限差定是又村役人^ノ触当、農家一同罷出秣取来ル所、相手之者共差図ニおよひ候ヲ以、今般同組之者共多人數罷越、右段ノ尾山江右新道造立、其上右秣場所々切起、此上当村之者共秣其外取候儀相成兼候様致候趣風聞承リ候間驚入、早速罷越見届ケ候所全相違無之、悉取賤之業御百姓相統方ニ抱リ難拾置、当月十五日、相手役人共方へ懸合之所、全人足差出道造又者所々堀立候ニ相違無之候間、勝手ニ可仕旨申之、余リ不法之働キニ付、同組本村^(郷カ)成沢村役人江相届ケ、御訴可奉申上与存、私シ共翌十六日谷村表江罷越願書認中、尚又相手之者共頭取同組之者共大勢右場所江差越、是适当村通行右道之分得新規ニ道筋造足シ、其外數ヶ所又候堀立、此上当村農家秣苅其外共差致儀、右之外日々ニ当村地内字小田和山与申場所峯通り新規ニ道造立候ヲ村方之者共見届ケ、其段夜中申来リ、不当之任義前奉申上候通り字段野尾山之儀者、往古^カ当村ニ限リ山役永上納、年々日限差定永来秣其外取来リ候所、相手之者共御願立断相立候後迄、右秣重々不当之及所業ニ、此佩差置候得者相手組内地統ニ付、当村秣場押領可仕巧ニ相違無之、小村遇昧与見掠メ、存外

不法之致方ニ付此段奉願上、何卒格別之以御慈悲、早々御見分之上相手之者共一同御召出し、御吟味被成下、往古^カ御役永上納之詮相立、小村農家一同安心御百姓永続相成候様、被仰付被下度、以具多ニも御威光奉願上候、右願之通り御聞濟被下置候ハ、難有仕合ニ奉存候、以上

安政五年

右

幸之進

三月

勝右衛門

谷村

御役所

利左衛門

乍恐以始末書奉申上候

当分御預リ所都留郡成沢村大田和組并本村役人・年寄・小前百九拾九人惣代名主太左衛門・伝次右衛門・年寄徳兵衛・同十左衛門一同奉申上候、同郡大嵐村名主利左衛門・組頭弥助・百姓代源五兵衛右代兼之由ヲ以年寄幸之進、同伊助父勝右衛門、右利左衛門^カ、私共村方枝郷大田和組与頭甚左衛門、百姓代幸左衛門江相掛リ、右大田和組之者共、大嵐村地内字段野尾山与唱候場所江新道立

候趣其外申立、当三月中奉出訴、同月廿日御差日御差紙頂載相付候ニ付、私共義御日限通り罷出、夫々御調御座候上ニ而、御出役御越論所御見分被成下、御吟味中私共義御絵図面相認奉差上候所、天保度私共村方并大嵐・勝山、木立・舟津五ヶ村組合共、当御役所江差上置候絵図面与認方引違候段御差当請、名主伝次右衛門、組頭甚左衛門代徳兵衛・百姓代幸左衛門代十左衛門義御咎御手当被仰付、奉恐入候義ニ而、右者訴訟方申立候字段の尾山之儀いざれニ候とも余村字ニ付、私共義差綺筋無之所、先年申伝ニも大嵐村蓮花寺裏之山ヲ壇ノ山与申、其之辺平地有之礎石今ニ有之候趣キ、旧来申伝も有之候得共、段ノ尾山与申者右蓮花寺裏山ニ有之議与存相認候得共、余村之字当持書加へ御絵図面奉差上候者、畢竟余事之儀疎漏之仕義、御察当請何とも奉恐入、此段不調法之次第幾重ニも奉承り御憐察度奉存候、為亦私共村方枝郷大田和組之者共、訴訟方大嵐村地内江新道造込、其外数ヶ所掘立、農家秣苅其外共差支候由申立奉出訴候得共、右者全偽り之儀ニて、私共郷村北山南面之分者、惣名足和田山与唱、足高・足柄・足和田富士三足与古来申唱

来り、右足和田峯通り往古郷境ニ有之、当二日中、先前之通り大田和組ニ而右通筋手入相繕ひ、其上旧有来り候猪・鹿留堀割等之儀も夫々手当仕候所、訴訟方地内江新道造立、所々堀発^(廢カ)し候坏、存外無筋之難波申掛ケ以手之外之儀ニ有之、一躰私共村方之儀者、御高六拾五石八斗四升九合、外ニ米四石六斗七升九合山畑年貢并蕎麦九石四斗三升式合野畑年貢、外ニ材木役御連上永六貫貳百五拾文、保太木役永五百文外ニ納夫等右之通り上納辻に御座候所、当村之儀者、余村与違富士山麓季候不順辺鄙之村方ニて、粟・稗・大豆・蕎麦等蒔付候而も、年々諸作実法方不熟、其上猪・鹿荒旁男女とも山稼重ニ而、营方罷在候村方ニ有之、先年秋元但馬守様御領分之節者、村持足和田山薪伐出し御陣中江差上、「^(屋カ)」年々作物不熟故、村高六拾五石八斗四升九合之分者、年々無年貢ニ被仰付、夫々御領所ニ相成候而も前同様当御陣屋江薪差上候故、宝永二^(西)年正徳五年迄、十一ヶ年之間前々之通り無年貢山畑年貢蕎麦年貢其外浮役御連上納来所、正徳度右足和田山内字水神堀与申場所ニ薪伐出し山小屋有之候所、右小屋申出火いたし北峯通り東大嵐郷境際込山内

立木悉焼失仕候故、其節御取調受、享保元申年以來、村高御本途辻御取箇上納被仰付候、尤保太木役永五百文之儀者、足和田山進退之冥加与して往古々上納いたし来候儀ニ有之、南之方者富士山江懸ヶ進退罷在、往古々御公儀様御巢鷹上納仕候場所ニ有之、一躰当村郷境之儀者、先年元禄十五年、成沢・大嵐・勝山・木立・舟津・浅川・大石・長浜都合八ヶ村与駿州富士郡上井出村、根原村与国境争論之節御吟味御見分之上、重キ御役人様方御尊判御裏書ニ御裁許墨引御図面ニも私シ共村方ヲ始めメ訴訟方大嵐村外六ヶ村郷境形御筆分ヶ有之、右御認之内訴訟方大嵐村与私共村方郷境者別而際立御認御渡ニ相成候義にて、元来境界相分リ居、旧古々私シ共村方持山之儀者、西者八代郡西湖村、精進村、北向者当郡長浜村、南面之分者私共村方持山にて、寛文度御檢地之節も都而六拾式筆山林御繩受進退いたし来、右六拾式筆之内四拾式筆者枝郷大田和組裏山通り之山内御繩受場所ニ有之、右山内峯通り、東者訴訟方大嵐村御普請所字小田和与申場所際江引通し候郷境にて脇前、元禄度御裁許御絵図面ニも村々郷境形皖与御認分有之、既ニ天明度当国八代郡精進

村々私共村方江相懸リ郡境山論御裁許絵図面御裏書御文言ニも前書元禄度御絵図面御認分にて八代・都留両郡境界相分リ候段御書載御裁許被仰渡候程之儀訴訟方えもの共意味之私シ共与見掠、今段当村持分足和田山内奪イ取、往々押領可仕所存ヲ以、大嵐村段ノ山之由峯越中、央迄同村分内ニ有之候等申立候段、余り不当之申分にて、何等之証拠ヲ以右様不当之儀中立候哉難心得奉存候、右申上候富士山北麓通り材木伐出シ山稼いたし候場所之内、御巢鷹山之儀も顯然、字丸山、三敷山、大寿み山・劔山・木物焼山・木びそ立山都合六ヶ所にて、私共村方進退之場所ニ有之候所、先年宝曆度訴訟方大嵐村并・勝山・木立・舟津・浅川五ヶ村之者共喙啄いたし、御巢鷹山ハ丸山壱ヶ所ニ有之、其上駿州往還道下成沢村内山道村々入会場ニ有之候等申之、難渋出入いたし懸候得共、是以謀斗取巧之儀故被為懸御吟味、場御見分之上にて私シ共申立候通り、右丸山外五ヶ所与も拾丁四方者双方共山稼者勿論枝葉下草共御停止、御巢鷹是迄之通り成沢村進退いたし、駿州往還道下之儀も私共村方内山ニ極リ、訴訟方村々入会御留ニ被遊御裁許被仰渡候程にて、今般迎

も大嵐村之者共、私シ共村方ヲ相掠メ、右様難渋出入いたし懸ケ一村相統方ニ抱リ候次第御堅察被下度、奉存候、前書奉申上候通り耽与郷境形相分居リ候御裁許御絵図面も頂載罷在候間、乍恐夫々証拠物御熟覽之上御嚴重御糺明被成下、向後不法之難題不申懸ケ、古来通り穩ニ郷境筋相守候様被仰付被下置度、奉願上候、且又、私シ共最寄組合村々廿々ケ村之儀、天保度御代官佐々木道太郎様御支配之節一同評儀之上、御年貢上納方者勿論、公事出入其外都而仕癖悪敷流幣(幣カ)に相成居リ候義ヲ改革仕、村々為筋ニ相成候様支度、其旨相認、組合村々役人共一同連印仕、尤年々行司村相立、当番行司村方役人ニテ諸役厚世話いたし候筈極、其旨御役所江申上、御代官様御奥書御判頂戴罷在諸事實素実正ニ取斗ひ来リ、然ル所一昨辰年述者右廿々ケ村一列いたし居候得共、村数多ニテ取斗向行届キ兼候間、去ル巳二月中猶又一同相談之上、右廿々ケ村ヲ二組ニ以たし、私し共村々組合之儀者、川口始メ浅川村迄都合九ケ村組合ニテ右之通り儀定連印仕、当年之儀者長浜、大嵐両村行司村ニ有之候得共、組合之内何連之村方ニ差違ニ而出来候与も、訴訟方大嵐村役人共ハ先立取

鎮方心配可致儀之所無其儀も、今般大田和組江相掛御願立仕候ニも、一円本村役人共江者、一言之断も不相立及出訴義ニ有之、右者郷境筋押領可致邪欲ニ走リ、組合村々手堅儀定連印之趣意も相破リ無筋之出入いたし掛リ候段不実意至極之致方ニテ歎敷次第ニ奉存候間、何卒格別之以御慈悲前文申上候趣意御堅慮被成下置、新規之企不仕、相互ニ古来之通り郷境筋相守、私し共義安穩ニ御百姓相統相成候様、被仰付被成下置度、奉願上候、依之此段始末書付ヲ以奉申上候、余者乍恐御吟味之節口上ヲ以、奉申上候、以上、

当分御預所

都留郡成沢村

役人小前年寄

百姓百九拾九人惣代

六月

名主

太左衛門

同

伝次右衛門

年寄

徳兵衛

同

十左衛門

清水孫次郎様

谷村御役所

乍恐以書付御愁訴奉上候

内海多次郎当分御頂リ所甲州郡留郡成沢村枝郷大田和組
 并右本村役人、小前百九拾九人惣代年寄徳兵衛・百姓代
 幸左衛門奉申上候、当村之儀者富士山麓山地辺鄙之所
 隣村何連茂山統ニて往古より都而峯通り境界相定リ有之、然
 ル処、五ヶ年以前午年二月中、当村枝郷大田和組之者共、
 隣村大嵐村地内字段ノ尾山与申秣場江新規ニ道筋造立、
 其上右場所々切起、数ヶ所堀立候等申掛ケ、同年三月
 中、同組役人共々当村大田和組与頭甚左衛門・百姓代幸
 左衛門江相懸リ不法御吟味願、先御支配清水孫次郎様谷
 村御役所江致出訴候ニ付、御差書ヲ以御呼出しニ相成、一
 ト通り御調之上場所御見分在之候処、元来大嵐村進退段
 野尾山之由申立候場所者、当村進退足和田与唱候山地ニ

て、一鉢当村北山南面之分者惣名足和田山与唱、足高・
 足柄・足和田右三山ヲ富士三足与古来を唱来リ、右足和
 山峯通り往古の境筋ニ有之、秋元但馬守様御領分之節者、
 当村持山右足和田山の薪伐出し上納仕、殊ニ作物不熟故
 村高六拾五石余年々無年貢ニ被仰付、御料所ニ相成候以
 来も、宝永二酉年の正徳五年迄拾ヶ年之間、前々之通
 リ無年貢ニて、浮役御運上而已相納来リ、享保元申年已来
 御本途辻御取箇上納被仰付、足和田山進退之為冥加保太
 木役永五百文上納致来、其余元禄度当村并大嵐村外六ヶ
 村の駿州上井出村外ヶ村江相懸リ候国境出入御裁許御
 絵図面ニも郷境形御筆分御認在之、猶又寛文度御檢地之
 節右足和田山当村持分ニて都合六拾貳筆畝ト御繩受いた
 し、当村御水帳ニ御書載ニ相成、右之内四拾貳筆者大田
 和組裏山通り之山内御繩受場所ニ有之、右山内峯通り東
 者大嵐村御普請所字小田和与申場所際江引通し郷境ニて
 脇前、境界疋与相分居リ候義ニて、大田和組居村の山核通
 ひ道筋取繕之儀者先前仕来にて、年々同組之者共道筋手
 入いたし仕来候猪・鹿留堀割等浚立いたし候義ニて、同
 年二月中仕来リ之通り手入致候ヲ、大嵐村之者共俄ニ差障

難題中掛候得共、聊以同村進退場に無之、然ル事実足和田山ヲ段野尾山之趣申偽リ山中央ニ境在之等申扮^扮連、全当村進退之山地奪取巧ニ付、大田和組而已ニ無之、一村江相抱リ候義故、本村一同大田和組江差加タリ始末書差上追々御調請候内、去ル末年八月中、右孫次良様御手付公事方山崎芳太郎様御懸リニ相成、御取調之上大嵐村ニテ論所絵図面認、私シ共方ニテ右江懸ケ絵図可致旨被仰付相認差上、右ヲ以論所御見分之上御吟味被成下候趣キ付、難有仕合与存差扣、御沙汰相待罷在候内、御場所替ニ相成、一ト先帰村被仰付置、当御支配ニ相成、去ル西七月中、訴答御呼出有之、公事方高梨丹次郎様御懸リニテ御調中、御代官様御入陣ニ相成、先月六日訴答御呼出、御直ニ御吟味御座候ニ付、証書書類差上御調奉請候処、朽入^{ウツ}而示談いたし立入候様可致旨、訴訟方江御利解有之、猶又翌日御呼出ニテ、前同様之御利解被仰聞、尤訴答申立之境形々有無双方立合場所見届ケ候上、示談可致旨被仰付候所、大嵐村ニテ者、訴答而已ニテ者不宜候間、双方宿立合貫見届ケ度与懸合在之、素々実地見届ケ候義ニテ、子細無之ニ付、右之段御懸様江申立、私し共郷宿^宿者代与し

て志方津村嘉平次与申者罷越一同立合、場所見届ケ候所大嵐村地内字小田和御普所^所三ッ境迄、東者大嵐村、南者当村大田和組峯境者双方申立候通りニテ、右三ッ境際^際大嵐村ニテ進退之場所申立候境界者、更境立印も無之、殊ニ同村分内^内論所者長浜村地内ヲ通り越候義ニ而、地統進退之由申立者如何ニも不都合之儀ニ在之、全私し共申立候通り峯通り境界ニ相違無之候得共、訴訟方無証拠ニテ我意申張、無余義一同場所引払立戻、御役所江双方^方申立候所、前同様訴訟方ニテ者、地統之趣キ頻ニ申立候ニ付、御役所ニ置ても地統之様思召候哉、論所之儀者、向後入会秣為^為取可申旨御利解有之、驚入全右場所者前書申上候通り当村進退地曆然与境筋相分リ居、是迄聊も大嵐村ニテ携候義無之場所已來為立入秣^秣取候様相成候て者難波ニ付、実地御見分之上境界真偽御吟味被成度、再応御見分之儀奉願上候得共、唯々大嵐村之者共、為立入可申旨之御利解而已被仰聞、何分私シ共申立御信用無之、此上大嵐村之者共取巧^巧ニ隋^隋リ、当地進退之山地被奪取候而者相統方ニ相抱リ左ニ候迎御役所江何様申立候而も実地御見分不被成下、甚々難波至極仕候間、無余義出府、

不顧恐多御駕籠(總カ)、御愁訴申上候、何卒格別之以御慈悲、前段逸々被為聞召訳、実地御見分之上境界真偽御吟味被成下置、向後大嵐村之者共、不法難涉不申懸ケ難難ニ相統出来候様、乍恐御報懸リ被成下置度、偏ニ奉願上候、以上

文久二戊年

七月

甲州都留郡成沢村枝郷

大田和組

成沢村

役人小前

百九拾九人惣代

年寄

得兵衛

百姓代

幸左衛門

上

無余義出府当月三日、酒井但馬守様江御歎願奉申上候
処、添簡無之差越願者御取用難被遊旨ヲ以、支配所代官
様江御引渡し相成、帰村途中ニテ等(ママ)勘弁仕候所、元来訴

訟方大嵐村之者共巧ヲ以申懸ケ候義ニ付、完初御代官様御直御調之節ニテ、訴証方許要之証拠ニ差上ケ候繪図御取用ニ不相成申立、更ニ難相立義之所、双方立合場所見届ケ被仰付、訴訟方別ニ証拠無之、唯々我意ニ諸事実相違之義申立候ヲ御信用相成、実地御見分願上候而も御取用無之為立入、秣為刃取可申与之義者、如何ニも難心得、其意存再応願上候得共、御見分不被成候義ニ付、此上両村(ママ)仕御役所江申立候与も、同様御取用無之者脇前左ニ候而者、全訴訟方謀斗ニ隨リ往来当村進退之山地奪取候次第ニ成行、曆然実地ニおゐて者、境界際立相分リ在之候ヲ申紛罷在候義ニ而、如何ニも心外至極、第一村相統方ニ相抱リ歎ケ敷奉存候間、不顧恐多、猶歎願奉申上候何卒格別之以御慈悲右之段被為聞召訳、論所御見分上境界真偽明白御吟味被成下候様、乍恐御報懸リ被下置度偏ニ奉願上候、以上

内海多次郎当分御預リ所

甲州都留郡成沢村枝郷

大田和組

成沢村

文久二戊七月

役人 小前

百九拾九人惣代

年寄

得兵衛

百姓代

幸左衛門

上

老はん訴

御勘定奉行

酒井但馬守様

同二はん訴

御老中

板倉周防守様

乍恐以書付奉歎願申上候

当分御預り所、都留郡成沢村大田和組并本村役人、小

前百九拾九人惣代之内、先名主太左衛門・年寄十左衛門

一同奉申上候、大嵐村名主利左衛門・与頭弥助・百姓源

五兵衛石代兼之由ヲ以、年寄幸之助・伊助父勝右衛門・

右利左衛門も、私シ共村方枝郷大田和組与頭甚左衛門・

百姓代幸左衛門江相掛、五ヶ年巳前年年三月中、同組之者

共、大嵐村地内字段ノ尾山与唱候場所江新規ニ道筋造立

候趣キ、其外先御支配清水孫次郎様谷村御役所江申立候

場所者、事実当分内惣名足和田与唱来、右足和田山峯通

リ往古も境筋ニテ既ニ始末書ヲ以申立置候通り、秋元但馬

守様御領分之節者、右足和田も薪伐出し上納仕、作場者

無年貢ニ有之、然ル所、御料所ニ相成候後、寛文度御檢地

之節右足和田山ニテ都合六拾弍筆山林畝歩御繩受、御水

帳ニ有之、右之内四拾弍筆ハ、大田和組裏山通り之山

内ニ有之、右場所峯通り東者大嵐御普請所字小田和与申

場所際江引通し境界者駈与相分り居リ候義ニ付、大田和居

村も山稼通ひ道筋取締者勿論、猪鹿留堀割浚立等追従

来リニテ（通）同組之者共取斗候間、同年二月中仕来リ之通リ

手入致候義ヲ、大嵐村之者共取立差障難題申掛候得共、

右場所者全当村進退所ニ無之、右段ノ尾山与申地名大嵐

村ニ有之候哉承知不仕、願書ニも段ノ尾山之儀者成沢村

境筋も当村内ニ孕リ居リ候与申立、就中秋元但馬守様御領

分之比歎々村にて認差上候郷鹿絵凶面之儀、長浜村其

節之名主当村大和方(付欠カ)にて遣シ候、睨与鹿絵図面ニ者大嵐村蓮花寺裏西之方ニだん之山載有之、然ル所、天保度成沢・大嵐・勝山・木立・舟つ五ヶ村連印差上候鹿絵図面ニ者、長浜分内ニ段ノ尾山書載有之、右者兼而取巧ミ、成沢・勝山・木立・舟つ四ヶ村江押隠、竊認込置候義ニ相違無之、然ル所五ヶ年已前午年中ニ至リ、当村分内惣名足和田山江段ノ尾山与申立候段、夫是不当至極、既ニ大嵐村日蓮宗蓮花寺境内裏西之方檀ノ山与申場所甲斐国志にも睨与載有之趣承知仕候得共、右ヲ足和田山江差(マツ)為候哉、乃至当村分内にて本村ノ西北之山峯西江一里余リ横たわり、八代郡西湖村境江掛リ足和田ヲ押領可致工ミ候哉、何共心外至極ニ奉存候、右孫次郎様御支配中、四ヶ年已前未年大嵐村江鹿絵図面為認、当村江掛ヶ絵図面可致旨被仰付、右ヲ以場所見分之上御吟味可被下置候趣ニ付、難有御儀与差扣江居リ候内、御場所替当御役所に相成、去ル七月中双方御呼出し有之、高梨内次郎様御掛リにて御取調中殿様御入陣、当六月六日双方被召出候間、証拠書類差上御吟味受候所、場所之義ハ全成沢分内ニ相違無之、大

嵐村ノ何様ニも折入而示談立入候様、御利解尤境形有無双方立会場所見届ケ候上、示談可仕旨被仰付候所、願方にて者訴答而已にて者不宜、双方宿立合貫度旨掛ヶ合有之、素ノ実地見届ケ方子細無之間其段申立当村郷宿ノ者、代与して四方津嘉平次罷越、一同立合見届ケ候所、願方地内字小田和御普請所ノ、三ツ境迄、東者大嵐村、南者成沢村大田和組峯境者、双方申立候通りにて、右三ツ境際ノ大嵐村にて進退之由申立候場所者、境界更ニ境不相立、大嵐村にて無証拠強情而已申張り、無余義一同場所引払、引続て御役所江罷出候而も同様大嵐村にて者地統之由還而申立候ニ付、御掛リ様ニも地統之様思召違被成候哉、論所者向後入合秣可為苅取旨御利解有之、驚入右場所者前書奉申上候次第にて境界分明いたし居リ、是迄大嵐村にて携候儀者決而無之、然ルヲ為立入秣苅取候様相成候而者相統(抱カ)ニ方抱リ誠至極難渋仕語り、当惑之余リ場所御見分境界真偽被仰付度段、再心御歎願申上候得共、大嵐村申立而已御取用、当村申立一円御取用無御座候、無拠重キ役人中様江御駕籠(籠カ)ニ棹リ奉歎願候所、差越之儀ニ付御差戻シ相成奉恐入候、其後当月朔日、尚又殿様御入陣被

在為候節、双方御呼出し之上、右段の尾山者大嵐村地内

ニ有之、左ニ候上者早々示談可仕旨御利解奉受候得共、事

実右始末柄ニ付御受出来兼候間、当村幸左衛門・徳兵衛

兩人ハ仮牢入、徳右衛門・幸吉兩人宿預ケ被仰付候段承

知奉驚入候、右ニ付村中之者共愁歎ニ沈ミ、殿様御利解之

通り檀ノ山大嵐村蓮花寺境内ニ有之候得共、願人申立候

場所者、段ノ山ニ無之惣名足和田山ニて場所場^(マ)居り候儀

ニ御座候得共、奉恐入候義ニ者相心得候得共、此上御手

元江罷出御歎願申上、実地御見分奉請、邪正分明仕願人

共段ノ尾山与申立惣名足和田山江大嵐村ニて無之儀不申

掛ケ、安心場所進退仕候様被仰付被成下置度、奉願上候、

何卒出格の以御慈悲、右段御聞被成下置候ハ、一村安

心御百姓相続出来、広大之御儀与難有仕合ニ奉存候、以

上

上^(マ)
当分御預り所

都留郡成沢村枝郷

文久二戌年

大 田 和 組

九年

役 人 小 前

百九拾九人惣代

先名主

太 左 衛 門

年寄

石和
御役所

十 左 衛 門

10 〔甲・駿国境定杭文言書替えの訴状〕

安政六年（一八五九）

〔解説〕 成沢村・大嵐村・勝山村・小立村・舟津村・上浅川

村の六カ村が、駿州上井出村・根原村を相手に起こした訴訟状

である。甲・駿国境にはその境界を示す御定杭が建てられてい

たが、それが腐朽して建て替えることになった。甲州側は成沢

村が代表となつて、両国と御林守立ち会いのもとに建てること

になつていたが、駿州側はそれを無視して定杭を建て、しかも

杭の文言が、甲駿国境とあつたものが、駿甲国境と改められた。

訴訟側が旧来の仕来り通りに文言を書き替えるよう、奉行所の

裁断を求めた内容の訴状である。

乍恐以書付御訴訟奉申上候

清水孫次郎当分御預所

甲州都留郡

山内甚五左衛門様御預所

成沢村

同州同郡

訴訟人

根原村

名主 伝次右衛門

同断 名主 源 藏

大嵐村

江川太郎左衛門様御支配所

同断 名主 弥 助

御林守

勝山村

同州同郡

同断 名主 幸左衛門

大宮町ニ住居罷在候

小立村

引受人 石川孫四郎殿

同断 名主 良右衛門

舟津村

右訴訟人共一同奉申上候、元禄度私共村々々、相手上井出村并根原村江相掛、甲・駿兩國富士山境筋之義及出入、

同断 名主 与五右衛門

兩國境絵図面江御墨引御裏書御尊判御裁許被仰付、境筋御定有之、其後享和度右場所御改之砌、國境御墨引之内

上浅川村

字判立場并長山尾崎与唱候場所々、甲・駿國境与認候御

同断 名主 善左衛門

定杭御打立被成下置、其後立替之度者、前書御林守并上

不法出入

江川太郎左衛門様御支配所

井出村・根原村・私共村々代表ニ而成沢村立会定杭相建

駿州富士郡

来雙方共聊差支無之罷在候、然処、御定杭年来相立文字

上井出村

相分兼候上朽腐候ニ付、当六月中御定杭建替度、夫々掛

相手 名主 幸右衛門

合定日相決、私共村々ヲ兼成沢村名主伝次右衛門義人足

召連罷越候処、相手之者共義御定杭江駿甲国境与認有之、

先規ニ相振難心得案内之義ニ付、先前之通甲駿国境与可

認、直段及懸合立戻、追而沙汰可有之筈之処、相手方之

もの共義、当月十八日私共江無談夫限、駿甲与認候俣立替

驚入、場所見届始末取詰及懸合候処、右者御林守之内石

川孫四郎殿任差図ニ、不沙汰手限ニ建替候杯、理不尽申

之、更ニ取放不申候へ共、甲駿国境与認来候義者、元禄度

境出入御裁許御文面ニ依而、右様古来ノ甲駿与書来候義

ヲ、今般彼等義自俣勝手ニ甲駿文字為狂書、剩私共不立

会建替候始末、何共不当之仕来先規仕来ニ拘、且者往々国

境分明之程難斗、無余儀御訴訟奉申上候、何卒格別之

以御仁惠、逸々被為聞召訳、相手引合之ものと与も一同被

召出、前書旧格不相守、自俣ニ建替候不当之仕儀御吟味

被成下、已来共仕来之通り、甲駿国境与相認、私共村々立

会之上、両国境御定杭相建候様、被仰付被下置度、偏

御威光奉願上候、以上

安政六未年九月

右

名主

伝次右衛門

同

弥助

同

幸左衛門

同

良右衛門

同

与五右衛門

同

善左衛門

御奉行所

繼添ヲ以奉願上候

前書不当之次第ニ而、旧格被相破心外至極ニ付、御奉行

所江御訴訟奉申上度、私共義相手村々江罷越姓名書差出

候様懸合および候而も、弥増不当而已構何分取放不申、

左候逆此低捨置候而ハ旧例相崩候而已ならず、往々国境
分明之程難斗、是非共始末御奉行所江奉願上度存候処、

何卒以 御慈悲本文之次第御堅察被成下、其御支配様江
御懸合被成下、相手之もの共国郡名住所等御写留之上
急々御奉行所江御差出被下度、奉願上候、右願之通御聞
濟被成下候ハ、難有仕合奉存候、已上

未九月

右

伝次右衛門

弥 助

幸右衛門

良右衛門

与五右衛門

善右衛門

谷 村

御 役 所

(鳴沢村役場蔵)

11 「高人狂・茅野出入訴訟御下ケ願書」

弘化三年(一八四六)

〔解説〕 大田和組の組頭半七・徳兵衛が名主角右衛門ほか村
役人を相手に起こした訴訟が内済(示談)となつたので訴訟を
中断して欲しいという願書。内容は、高の入れ狂いがあつたが
書算人の精査で内容が明らかになつたこと。入会茅野は議定書
により入会う場所が本村分、枝郷分(大田和)と決められてい
たが、双方がこれに違反して紛争が絶えなかつたが、立会人が
議定書を預り、以後境界を取りはずし相互が話し合いで、互い
に都合のよい場所に入り会うことで両事件が示談となつた。

乍恐以書付御下ケ奉願上候

御支配所成沢村大田和組与頭半七・同徳兵衛、成沢村
名主角右衛門外役人江相掛、山内押領出入之旨早々申立
奉出訴候ニ付、相手方ニ而も返答書ヲ以夫々始末御答申
上御調中之処、大田和組分高人狂之廉考、先達而中書算
人立合取調、事訳柄相別り、^(分)双方申分別紙ヲ以御願下ケ
仕候ニ付、尚山内争論之儀も、双方小前之ものゝ相当ニ之
取計請度旨□入亦書算人江相頼候ニ付、双方異見差加熟

談内濟仕候趣意左ニ奉申上候

当村御高外山野木草伐刈之儀者元来本村分、大田和組分

弘化三年二月

与場所引分り候書物等無之候得共、素々茅野之儀者入会

願方

成沢村大田和組
半頭 七

境立有之、尤相互ニ勝手宜敷最寄之場所ニ而伐刈いたし、

双方無差支年来穩ニ相治来り候間、去々辰并去巳兩年中

兩度、議定書等致、本村・枝郷之場所分ヶ仕候ヲ、兩度

成沢村

互ニ違変仕候故、畢竟彼是論立出入および候様成行不宜

儀ニ付、左之名前之者立入訴訟方意味合了解、右議定書

相手方

役人惣代
年寄 善四郎

之儀者實請、素々一村一躰之儀ニ而山役永等上納仕来方

互ニ実意ニ立戻銘々所持立林之義者相除、其余御高外山

野之儀者場所分ヶ等不仕、本村・枝郷之無隔意相互に談

同

小前惣代
和十郎

合之上、夫々最寄宜敷場所ニ而伐刈仕、双方共無差支様

可仕筈、尤村持立林、萱山之儀者は亦、相談之上最寄之

同

庄兵衛

場所江立置、勝手ニ伐刈等不仕、以来相互ニ睦敷仕候筈、

其外双方の品申立御座候者、立入人實請訴答無申分掛合

同

村書算人
伝兵衛

行届和熟内濟仕偏ニ

同

周右衛門

御威光与難有仕合ニ奉存候、然ル上者、右一件ニ付此上双

方共御願筋無御座候間、御調是迄ニ而御下被成下置度、

同

同村大田和組

依之連印ヲ以奉願上候 以上

同断

同 縫右衛門

同 孫右衛門

同 久右衛門

谷村

郷源 宗甚 太助 七郎

谷村

御役所

(鳴沢・渡辺治徳家蔵)

12 「足和田山をめぐる境界論争の歎願書」 (三点)

文久三年(一八六三)

〔解説〕 次の文書三点は、大嵐村と鳴沢村大田和組の村境

(足和田山、段ノ尾)をめぐる論争で、鳴沢村が奉行所に申し

出た歎願書写である。谷村代官所の訴訟裁定を不服とした大田

和組は、鳴沢村全村を挙げこれに対処した。この論争は、寛文

検地水帳にも記載され、山手年貢も上納、古来から大田和組が

進退(管理)の場所であることを主張、再三論争の見分を願
い出たが、逆に入牢者を出すという結果に終わった。村では一村
にかかわる大事件として、代表者を出府させ奉行所に歎願し
た。

(1) 乍恐以書付御愁訴奉申上候

内海多次郎当分御預リ所、甲斐郡留郡成沢村枝郷大田和
組代兼、右成沢村小前村役人惣代年寄太左衛門、百姓代
幸左衛門一同奉申上候、当村之義者、富士山麓山地辺鄙
之場所、隣村何連も山統ニ而、東者大嵐村、北者長浜村西
者西湖村、都而山地峯通り境筋ニ相定リ有之、然ル所枝郷
大田和組居村統、字且和山与唱候当村進退之山地、同組
之者共往古々致山稼、又者秣苺取畑肥ニ相用、年々山稼
通ひ道筋取締并猪鹿留堀割等浚立致来ル所、六ヶ年前午年
二月中、定例之通り道筋并堀割浚立いたし候を、大嵐之
もの共故障申出、同村地内秣場江新規ニ道筋造立所々切
起し、数ヶ所掘立候杯難題申懸ケ、同年三月中右村役人
共々、大田和組与頭甚左衛門、百姓代幸左衛門江相掛、
不法御吟味願、清水孫次郎様御支配之砌、谷村御役所江

致出願御呼出ニ相成御調受候処、大嵐にて者、大田和
 組之もの共道筋出入等致候場所者、大嵐村内地字段ノ
 尾山与唱、従来同村進退罷在候趣ニ申立候得共、右場所者
 惣名足和田山与唱、峯通り境にて、北者隣村長浜村内地、
 南者当村内地ニ在之、其詮者秋元但馬守様御領分ノ
 節、同所ノ薪伐出し上納仕、殊ニ作物不熟故、村高六拾
 五石余無年貢にて、御領所ニ相成候以来も、宝永二酉年ノ
 正徳五末年迄拾壹ヶ年之間、前々之通り無年貢にて、浮
 役御運上而已相納来リ、享保元申年已来、御本途辻御取
 箇上納被 仰付、足和田進退之為冥加、保太木役永五百
 文年々上納被 仰付致来、寛文度御檢地之節、同所ニ而
 都合六拾貳筆山林畝分御繩受いたし、当村水帳ニ御書載
 ニ相成、右之内四拾貳筆者、大田和裏山通り御繩受場所
 ニ在之、年々御年貢上納致来、聊も大嵐村にて携候場所
 無之、殊ニ右場所者、同村之地理相離レ、長浜村内地ノ越
 不申候^(破)□□通行難相成、且者山中央ニ境在之様申立、又
 者天保八酉年中、当村并大嵐村外三ヶ村一紙ニ認、谷村御
 役所江差出候村絵図面ニ、足和田山長浜村内地之分江段

ノ尾山名所相付有之ヲ、今般場所之証拠ニ申立候得共、右
 者名所相記置候迄之義も、山境者都而逢通り境界相認有
 之、旁以事實相違仕、全当村進退之山地可奪取巧にて、
 名所ヲ引違江難題申懸ケ候義ニ付、大田和而已無之、一村
 ニ抱リ候義難捨置、本村一同右組江差加リ俱々御調受候
 内、去ル末年八月中、右孫次郎様御手付公事方山崎芳太
 郎殿御懸リニ相成、大嵐村にて絵図面相認、当村にて右
 江懸ケ絵図いたし可差出、右ヲ以論所御見分之上御調被
 成下候趣ニ付則相認差上、御沙汰相待罷在候内御場所替
 跡当御支配ニ相成、去ル酉七月中双方御呼出し有之、公
 事方高梨丹次殿御懸にて御調中、御代官様御入陣ニ相成、
 御直々御吟味御座候ニ付、証拠書類差上御調受候処、論
 所之儀者、全成沢村進退場ニ相違無之、此上御裁許受候
 上者、大嵐村持山難相成、折入^(示)而尔談可致^(示)願人江御利解
 有之、尤双方申立之境形ケ有無場所立合見届ケ之上尔談
 可致与被 仰聞、依之双方帰村、場所立合見届ケ候
 得共、大嵐村進退之趣申立候場所境界者更ニ境立之印も
 無之、殊地理引離レ居、地続進退之申立者、如何ニも不都
 合之義にて、峯通り境界ニ無紛相分リ居候ヲ訴人共無証拠

ニて我意ヲ強^(示)カ談不行届、其段双方ノ申立候所、如何様之義ニ候哉、論所之義、勿論大嵐村入合秣為苅取可申旨究、初ニ引替候御利解有之、驚入眼前実地ヲ引違候申立御信用ニ相成、從來進退之場所被奪取候て者相統方ニ抱リ難渋至極ニ付、実地御見分之上境界真偽御吟味被成下度段、再応奉願上候得共御取用無之、無余義不顧恐、去戌七月中出府御歎願奉申上候所、差越願者御取用難被遊旨ヲ以、御支配御役所江御引渡しニ相成、何連ニ茂焔村之上国許御役所江、御見分可相願旨江戸於御役所被申聞、無拋焔村仕、去ル末年八月中差上置候懸ケ繪図ヲ以論所江御引合御見分被成下度只管相願候得共、前同様之御利解ニて承伏不仕候迎、終ニ惣代年寄徳兵衛、百姓代幸左衛門兩人入牢被申付、日數百日余リ在牢被申付置、猶亦達吉、徳右衛門兩人呼出ニ相成、先前徳兵衛、幸左衛門江申聞候通り濟方可致様も無之候得者同様入牢被申付候怀、無躰之御利解有之候得共、兩人ニおゐても素ノ承伏難相成候間、其段申立、御代官様御手元江罷出、実地御見分之義歎願罷在候内、月迫ニ相成徳兵衛、幸左衛門漸々出

牢ニ相成候義ニて、夫迄願人方者焔村被申付置、唯々私し共江而已御利解有之、右願人共何様取巧我意ニ募リ立候与も、素ノ地所ニ相抱リ候義、御見分も無之無拋ニて申争ひ候方ヲ御信用ニ相成、的証在之私し共申立御信用不相成、却而入牢被申付候段、如何ニも難得其意、此上御利解通り承伏致候得者、願人共巧ニ隨^(應)カ、從來進退之山地者勿論、御水帳ニ有之山林迄被奪取候次第ニ成行、御年貢御上納ニ差響、一同相統方ニ相抱リ候間、小前連印願書ヲ以実地御見分相願候得共足以御取用不相成、誠ニ以難渋至極仕候間、不顧恐多出府御駕籠ニ縋リ御愁訴奉申上候、何卒出格之以、御慈悲前願逸々被為聞召訊、右躰御支配役所ニて者、地所ニ相抱リ候義ヲ御見分も無之、無躰之御利解而已ニ而、難渋仕候間一件、御奉行所様江御引上ケ、論所御見分之上境界真偽御吟味被成下候様、御憐愍之御沙汰偏ニ奉願上候以上

文久三亥四月

内海多次郎当分御預リ所

甲州都留郡成沢村

枝郷

大田和組代兼

成 沢 村

小前村役人惣代

年寄

太左衛門

大田和組

百姓代

幸左衛門

格別之以 御慈悲右一件御奉行所江御引上ケ論所境界御

取調真偽御吟味被成下置候様

御憐愍之程偏ニ奉願上候以上

内海多次郎当分御預り所

甲州都留郡成沢村

文久三亥四月

枝郷

大田和組代兼

小前村役人惣代

年寄

太左衛門

大田和組

百姓代

幸左衛門

上

前書之通り、御願、歎奉申上候処、添簡無之差越願者御
取用難被遊被

仰渡、御支配御役所江御引渡ニ相成、帰村被申付候間、国
許御役所江罷出、御見分可相願義ニ候得共、既ニ去ル戌年
中ノ数度右之趣願出候ても取用無之、入牢被申付置候程
之義故、此上願上候与茂御見分者扱置、又々入牢被

仰付候者眼前、素ノ地所ニ相抱リ候義、実地御調無之、

願方申分而已御取用相成、的証有之事實申立候義、御信
用無段、如何ニも難ケ敷次第、込も御支配役所ニて者、御
調不被成下義、旁以帰村難出来候間、不願恐歎願奉申上
候、何卒

上

(2) 乍恐以書付御愁訴奉申上候

内海多次郎当分御預所、甲州都留郡成沢村枝郷大田和組
代兼、右成沢村小前村役人惣代年寄太左衛門、百姓代幸
左衛門一同奉申上候、当村之義者富士山麓山地辺鄙之場
所、隣村何連も山統ニ而、東者大嵐村、北者長浜村、西

者西湖村都而山地峯通り境筋ニ相定リ有之、然ル処枝郷大田和組居村統字足和田与唱へ当村進退之山地、同組之者共往古より致山稼、又者秣刈取畑肥ニ相用、年々山稼通ひ道筋取締并猪鹿留堀割等凌立致来リ候処、六ヶ年前午二年月中定例通り道筋繕并堀割凌立いたし候を、大嵐村者共故障申出、同村地内秣場江新規二道筋造立、所々切起し数ヶ所堀立候杯難題申掛ケ、同年三月中右村役人共、大田和組与頭甚左衛門、百姓代幸左衛門江相掛リ、不法吟味願清水孫次郎様御支配之砌、谷村御役所江致出願、御呼出ニ相成御調受候処、大嵐村ニて者、大田和組之者共道筋手入等致候場所者、大嵐村字地内字段之尾山与唱、従来同村進退罷在候趣キ申立候得共、右場所者惣名足和田山与唱峯通り境ニて、北者隣村長浜地内、南者当村地内ニ有之、其詮者秋元(詔カ)但馬守様御領分之節、同所より賃伐出し上納仕、殊ニ作物不熟故村高六拾五石余無年貢ニて、御領所ニ相成候以来も、宝永二酉年より正徳五末年迄拾壹ヶ年之間、前々之通り無年貢ニて、浮役御連上而已相納来、享保元年申年以来御本途辻御取箇上納被仰付、足和田進退之為冥加、保太木役永五百文、年々上納致来リ、

寛文度御検地之節、同所ニて都合六拾貳筆山林畝歩御繩受いたし、当村御水帳ニ御書載ニ相成、右之内四拾貳筆ハ大田和組裏山通り御繩受場所ニ在之、年々御年貢上納致来り聊も大嵐村ニて携候場所ニ無之、殊ニ右場所者同村之地理相離連、長浜村地内より越不申候而者通行難相成、且者山中央ニ境在之趣キ申立、又者天保八酉年中当村并大嵐村外三ヶ村一紙ニ認谷村役所江差上候村絵図面ニ、足和田山長浜村地内之分江段ノ尾山之名所相付有之ヲ、今般論所之証拠ニ申立候得共、右者名所相記置候込之義ニて、山境ハ都而峯通り境界ニ相認有之、旁以事実相違仕、全当村進退之山地可奪取巧ニて、名所より引違難題申懸ヶ候義ニ付、大田和組而已ニ無之、一村ニ拘り候義難捨置、本村一同大田和組江差加り俱ニ御調受候内、去ル末年八月中右孫次郎様御手付公事方、山崎芳太郎殿御懸リニ相成、大嵐村ニて論所絵図面相認、当村ニて右江懸ヶ絵図いたし可差出、右より以論所御見分之上、御調被成下趣ニ付、則相認差上御沙汰相待罷在候内、御場所替ニて、跡当御支配ニ相成去ル七月中双方御呼出し在之、公事方高梨丹次殿御懸リニて御調中、御代官様御入陣ニ相成、御直々御

吟味御座候ニ付、証拠書類差上御調受候処、論所之義者、全成沢村進退場ニ相違無之御裁許受候上者、大嵐村持山ニ難相成、折入(カ)而爾談可致与訴人方江御理解有之、尤双方申立之境形有無場所見届之上示談可致与被仰聞、依之双方帰村、場所見届掛合候得共、大嵐村ニテ進退之趣ニ申立候場所境界者、更ニ境立之印も無之、殊ニ地理離連居地統進退之申立者如何ニも不都合之段ニテ、峯通り境界ニ無紛相分リ居リ候ヲ、願人共無証拠ニ而我意ヲ強、示談不行届、其段双方ヲ申立候処、如何様之義ニ候哉、論所之義向後大嵐村入会秣為取可申与究、初ニ引替リ候御理解有之、驚人眼前実地与引違候申立ヲ御信用ニ相成、從來進退之場所被奪取候而者相統方ニ拘リ難洩至極ニ付、御見分之上境界真偽御吟味被成下度段、再応奉願上候得共、御取用無之、無余義不願恐、去ル戊七月中出府御歎願奉申上候処、差越願者御取用難被遊旨ヲ以、御支配御役所江御引渡シニ相成、何連ニ茂帰村之上国許御役所江御見分可願旨与、江戸於御役所被申聞、無拠帰村仕去ル末年八月中、差上置懸絵図ヲ以、論所御引合御見分被成下度、只管相願候得共、前同様之御理解ニテ承伏不仕

候迎、終ニ惣代年寄徳兵衛百姓幸左衛門兩人入牢被申付、日数百日余リ在牢被申付、猶亦幸吉、徳右衛門兩人御呼出ニ相成、先前徳兵衛・幸左衛門江申聞候通りニテ濟方可致様も無之候得者、同様入牢被申付候杯、無駄之御理解有之候得共、兩人ニおゐても素々承伏難相成候間其段申立、御代官様御手江罷出実地御見分之儀歎願ニ罷在候内、月迫ニ相成、徳兵衛、幸左衛門漸々出牢ニ相成候義者、夫迄願人方者帰村被申付置、唯々私共方江而已御理解有之、素々地所ニ相抱リ候義、実地御見分も無之、無証拠申争ひ候方ヲ御信用被成、証拠ヲ以申立候義ヲ御信用不相成、却而入牢被申付候段、如何ニも高梨丹次郎殿御調向難心得、此上御理解通り承伏致候得者、願人共巧(カ)ニ随リ、從來進退之山地者勿論、御水帳ニ在之候山林込も奪取次第ニ成行、御年貢上納ニ差響一村相統方ニ相抱リ候間、惣百姓小前連印願書ヲ以実地御見分相願候得共、是以御信用不相成、難洩至極仕、右秣御役所ニテ者、地所ニ拘リ候義御見分も無之、無駄之御理解而已被申聞候間、一件御奉行所様江御引上々、論所御見分之上、境界真偽御吟

味被成下度段、当四月中出府、松平豊前守様江兩度御

歎願奉申上候処、添簡無之差越願者御取用難被遊旨被

仰渡、其時々御支配御役所江御引渡しニ相成、帰村被申

付候得共、此上谷村御役所江罷出相訴候而も、素々依怙

之御調ニ付、御取用無之者眼前、作分之御吟味請、從來

進退之山地被奪取候段、難々數次第ニ付、不願恐多猶又

御歎願奉申上候、何卒格別之以

御慈悲前願逸々被為聞召訳、右一件

御奉行所様ニおゐて、論所御見分之上御吟味被成下置候

様、偏ニ奉願上候、以上

百姓代
幸左衛門

上

御老中

松平豊前守様

同

同 豊前守様

同

同 井上河内守様

(3) 乍恐以書付奉申上候

甲州大嵐村一件、相手方成沢村惣代年寄十左衛門外老

人、奉申上候右一件、御吟味中ニ御座候所、論所足和田

山之義、大嵐村ニ而者、段ノ尾山与唱、從來同村秣場ニ而

青草永年々御役所江上納、村明細帳ニも認有之候与申立

候得共、論所之儀者足和田山ニて往古々当村進退仕、峯

通り境、北者長浜村持山ニて同様足和田山与唱、既ニ寛永

度鳥居淡跡守様御領分之節、長浜村与隣村勝山村境筋及

出入、其砌長浜村江御書下ニも足和田山名所者睨与御書

内海多次郎当分御預り所

甲州都留郡成沢村

枝郷

大田和組代兼

右

成 沢 村

年寄 太左衛門

大田和組

文久三亥六月

載有之、当村にて者、秋元但馬守様御領分之節者、右足和田山ノ薪伐出し上納いたし、元来山地作物不熟之村方故、無年貢ニ被 仰付、其後御料所ニ相成而も前同様薪伐出し相納、宝永二酉年ノ正徳五年迄前々之通り無年貢にて、御運上物而已上納、今以薪伐出し候小屋跡有之、右足和田山進退之冥加として往古ノ保太木役永五百文宛上納いたし、年々御割付并皆済御目録ニも御書載ニ相成候儀、且亦寛文度御検地之節、山林御繩受いたし論所足和田山之内、字水神・堀内与申場所にて山林畝歩御繩受、当村御水帳ニも筆限り御書載ニ相成、年々御年貢之上納罷在、全当村進退足和田山ニ相違無之、既ニ御支配御役所御調中、峯通り境長浜村ヲも御呼出御札御座候所、三ヶ村境之義者、私し共申立候境ニ無相違、長浜村地内江大嵐村にて道筋跡開キ候儀者、同村にて承知いたし候儀者無之段、夫々心得方書面ヲ以申立候儀にて、訴訟方三ヶ村境与申立候場所者、当村与長浜村之境にて猪鹿留堀割有之、三ツ境与申者不都合之段、御見分之節訴訟方江御察当有之、一鉢大嵐村之儀者、持山場広にて字段ノ尾山与唱候秣場有之候ヲ、近来ニ相成追々苗木植付林ニ

たし候者、眼前同所ニ者大木之切株跡も無之、畢竟論所足和田山ヲ可奪取巧ノ、右段の尾山ヲ足和田江字送りいたし、従来之秣場林ニ仕立候義与相聞江、且亦村明細帳ニ青草永上納并段之尾山ニ秣刈取候与認有之候由申立在候得共、右明細帳も御支配御役所にて御取調有之候所、年々相違之認方、且者明細帳者其村限り之儀にて、他村ニ対し候証拠ニ者不相互、旁御取用難相成段被、仰聞候次第にて、訴訟方之者共、年来取巧にて長浜村内江新道跡分ヶ置、今般之出入申懸ヶ候儀無相違、従来進退之足和田山訴訟方江被奪取候而者、当村相統方ニ相抱リ、甚難波至極仕候間、何卒以 御慈悲前段逸々被聞召訳、訴訟方取巧之始末御吟味之上、足和田山是迄之通り当村進退被仰付被下置候様、奉願上候、以上

増田安兵衛当分御預所

甲州都留郡成沢村

子十月二日

小前百九拾九人惣代

年寄

十左衛門

百姓代

幸左衛門

御奉行所様

有馬出雲守様

神田橋

御奉行所

書上写

桑原十左衛門

(鳴沢村役場蔵)

13 〔精進村境出入の返答書御請証文〕 年不詳

〔解説〕 八代郡・都留郡境に山之神社があり、精進村の者が郡境を超え山稼ぎに入山したため、成沢村の者大勢が故障し争いとなり、精進村が成沢村（鳴沢村）を相手に訴訟を起こし、成沢村の関係者が役所に召喚され種々問い正されるという事件が起きた。精進村は御朱印をたてに成沢村を不当としたが、成沢村にも言い分があった。精進村の者が成沢山内で再三立木の伐り荒らしをしたが、成沢では訴訟を差し扣えた。それを無視して今回の訴訟は納得いかないというのである。役所では訴訟に対する返答書を成沢村に求めたもので、この文書はその御請け証文である。

〔差上カ
申御請書之事〕

一 柴村藤三郎様御支配甲〔州カ〕八代郡九一色郷之内精進村
 〆、私共方相手取回国八代郡与両郡境先前〆山之神社
 有之旨、精進村内右村者共山神ニ罷出候処、私共村方
 〆大勢罷出差障り道橋伐崩シ、且又精進村之儀ハ、御
 朱印頂戴御由緒有之候処、御朱印も不恐、我假相働難
 儀仕候旨申立、御吟味御願申上候ニ付、私共被召出精
 進村訴状再認、為御読聞御吟味御座候、此儀右村之者
 共先年〆度々成沢村山内入へ密入、余立木伐取成沢村
 内伐あらし、其度々咎、山道具取押候所、心得違誤証
 文等取置申候、余り数度之儀故私共〆御願可申上、奉
 存候へ共、郡境之出入ニ御座候得ハ、貧窮之成沢村之
 儀ニ御座候ニ付、差扣罷在候処、精進村〆之相手取迷
 惑ニ仕り候

一 御朱印頂戴仕り罷有候旨申立候此儀、何如御文談御座
 候趣、私共村内山内之竹木自由ニ伐取候様ニ御墨付御
 座候趣難心得奉存候

右之通訴訟方精進村訴上之趣、逐一難心得奉存候旨申

上候ニ付、要細返答書ヲ以答上可申旨奉畏候、帰村仕
り年寄り之者共へ承合、来ル七月朔日迄御日延可被下
旨願上候所、六月廿八九日迄認メ可持参旨被仰渡奉畏
候、依之御請連印差上申候、以上

子六月十九日

成 沢

名 主 源 兵 衛

同 断 伝 兵 衛

与 頭 文 右 衛 門

百 姓 代 伝 五 右 衛 門

久保平三郎様

御役所

注・本文書は年不評であるが、柴村・久保両代官の任期か
ら、明和五子年（一七六八）のものと考えられる。

（鳴沢・渡辺泰一家蔵）